



電子書籍化を進めてみて

小田部 荘司¹

甲斐先生から巻頭言を最近の電子書籍の話題などで書かれませんか？という依頼があったので、私でもいいのかな、と思いながらも、「頼まれたら断らない」という「工学部7つのオキテ」を守り、お引き受けしました。ここでは電子書籍化の最近の動きをまとめてみようかと思えます。

電子書籍に流れていったのは、やはり書くのが好きだからなのでしょう。でもはじめから書くのが好きというわけではありませんでした。私はいわゆる帰国子女として、6歳の時に米国から日本に来ました。半年で日本語がしゃべれているのだから子供はすごいのですが、それでもいろいろと日本語には苦労させられました。日本語の文字の種類が多さに圧倒され、日本人の考え方を奇異に思っていたなんて思い出がたくさんあります。だいたいあんな複雑な字をきれいに書けるはずがないという偏見から、文字、文章、文書などを毛嫌いしていたところがありました。もっとも、本を読むのはとても好きでした。

大学になって、PCでワープロができるようになったときに、真っ先に飛びつきました。まだほとんどの学生は卒論を手書きで書いておりましたが、私は数式の入力に苦労しながら「一太郎 version4」で書きました。知人から TeX を教えていただいたときには、本当に驚きました。数式がきれいに出来るようになったので、これで手書きから完全に抜け出すことができると喜んだものです。

この情報技術によって、汚い字から抜け出すことができ、大量の文章を書くことができる PC があ、そのおかげで文章を書くのが好きになっていきました。特に大学人は文章を書く機会が多いので、あちこちから批判を受けながらも、大量の文書を作ることになりました。教科書も書きました。

そんななかで書籍の分野で転機が訪れたのが、2012年10月のアマゾンの Kindle ダイレクト・パブリッシング (KDP) でした。書籍の自費出版をネット上だけでできるようになったのです。私もワープロ、TeX、教科書ときたので、自分で出版ができることに大変な興味を覚えて、乗り出すことにしました。正直、アーリーアダプタとしてかなり苦労しました。まず TeX から PDF にすれば万能という考えがうち捨てられていました。電子書籍ではフォントの大きさを自由に変更することができるリフロー形式というのにあわせる必要がありました。リフロー形式では本の体裁やページという概念が壊されています。これは数式、表、グラフ、図の多い理系図書にとってはとても辛いことです。なんだかんだあって、出版にこぎつけたのですが、その苦労話は私のホームページから読まれてください。

(「理系 電子出版」で検索。 <http://aquarius10.cse.kyutech.ac.jp/~otabe/kindle2/index.html>)

2016年の夏に九州の大学生協の理事長が集まる会議がありまして、私は、九州工業大学大学生協同組合(九工大生協)の理事長になったばかりで参加しました。そのときに大学生協でも電子書籍のプラットフォームを作っているということを知りました。世の中には Kindle 以外にもいくつも電子書籍

¹大学院情報工学研究院 電子情報工学研究系 教授 otabe@cse.kyutech.ac.jp

を扱うプラットフォームはあるので、その一つだろうくらいで思っていたのですが、担当者と会ってみて違うことに気がつきました。端的に言えば、「本の文化を守り、若者の書籍離れを食い止めよう」という考えがあったのです。私たち教員は難しい本を読んで、もし分からなければ、分かるまで読み続けるということをし続けてきました。そういう文化でした。最近では、分からなくなったときに、手軽に入る情報が多いので検索し続け、それでも無ければもう考えることはせずに、あきらめます。電子に移行して紙の本はなくなっても構わないけど、知の集積と継承の象徴としての本は無くなったら困ります。その想いを大学生協の電子書籍の担当者と共有することができたので、2017年から大学生協のプラットフォームを使った電子書籍を試してみることにしました。

Kindleは電子書籍を配信し、読むことができるプラットフォームです。これに対して、大学生協の電子書籍のプラットフォームは配信、ビューワーだけでなく、付箋の共有、アンケート機能、資料配信、ログ管理など様々な機能があります。まるで仮想的なクラスルームを作り、授業の支援をしてもらっている感覚です。現在の学生はほとんどスマホを持ち歩いていますので、私のクラスではデバイスが無いので電子書籍を読めません、という学生はいませんでした。付箋の共有を使うと、教科書の訂正や指示を一度にできます。アンケート機能で最初に聞いたのは「朝食を食べましたか？」ですが、1分もあれば結果を集計することができます。資料配信はmoodleがあるので、正直なところあまり利用していません。ログが取れるので様々な解析ができ、これは将来教育の方法を変える可能性があります。たとえば最も読まれたページは、最もややこしい図が載せてあるページでした。来年度は、学生に「このページは昨年最も読まれたページだから、気合いを入れて理解してください」って自信を持ってアドバイスできます。

情報工学部ではBYOD(Bring Your Own Device)が平成30年度から試行されて、将来は全学でも推進されると決まりました。電子書籍は学生にとってBYOD利用の大きな理由の一つになります。うまくいけば重たい教科書を持ち運ばずにすみ、どこでも読むことができます。最近になって、講義のノートタブレット端末でとっている学生を見かけるようになりました。彼らは将来社会に出たときに、いつでも教科書と自分のノートを見返すことができます。

これまで情報科学センターは、情報科学センターにある機材について選定し、保守し、サービスを提供していくという業務だったと思います。これからは、BYODでは多様な端末に対して、さまざまなサービスを提供していかなければいけないので、情報科学センターの果たす役割はとても大きなものになると考えています。この役割の変更は、大型計算機を端末で使っていたところから、UNIXワークステーションに変わったときに匹敵する、大きな変革でしょう。情報科学センターから積極的な提案がでて、日本や世界をリードする情報技術による文化を、九州工業大学から発信できることをとても心強く思いますし、これからも益々発展していくことを期待しています。